報告番号　甲　乙　　第　　号

石井 雅巳君　博士学位請求論文　審査報告書

論文題目：レヴィナス哲学における時間の脱形式化

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授
　　同大学大学院文学研究科委員　　斎藤慶典
副査　立教大学文学部准教授　　渡名喜庸哲
副査　東京大学大学院総合文化研究科准教授　　藤岡俊博

石井雅巳君の博士学位請求論文は、二〇世紀フランスで活躍した哲学者エマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Levinas, 1906-1995）がその活動の全時期にわたり様々な著作において語った時間に関する叙述を分析することを通して、その哲学の全体像を時間の観点から描き出そうとする意欲的な試みである。レヴィナス哲学における時間論の重要性はこれまでもしばしば指摘されてきたが、本論文はそうした先行研究に十分な目配りをした上で、「時間の脱形式化」という試みこそ、レヴィナス時間論の内実を成すと共に彼の哲学全体の企図であることを明らかにしている。哲学上の一つの主題として時間を論じるのではなく、「時間の脱形式化」という観点からレヴィナス哲学全体の生成や展開を明らかにしようとする点で、本論文は単にレヴィナス哲学の個別的研究に留まらず、時間や倫理に関する哲学・思想研究一般に広く議論を提供するものとなっており、高い学術的価値を有する。

論文の構成

本論文は序章と７つの章、終章から構成されている。その全体の課題は、時間の観点からレヴィナス哲学の全体像を示すことである。本論文は、大きく第 I 部（第 1〜2 章）、第 II 部（第 3〜5 章）、第 III 部（第 6〜7 章）に分かれる。第 I 部は、具体的な現実を生きる人間の歴史性に着目しつつなされた前期（1930 年代〜40 年代）レヴィナスによるフッサール現象学ならびにハイデガー存在論受容の経緯を整理し（第 1 章）、ユダヤ教に由来しながらもレヴィナス独自の「メシア的時間」の概念が提示された『実存から実存者へ』（1947 年）の分析を行なう（第 2 章）。第 II 部は、第一の主著『全体性と無限』（1961 年）において展開された「享受」と「エコノミー」という自己の基礎的存在様態がもつ時間性を検討すると共に（第 3 章）、倫理的関係における自

我と他者の錯綜する先後関係を解明し（第4章）、自我を他者に結びつける「エロス」および「繁殖性」における時間性の読解を以て同書全体を時間の観点から網羅的に解釈する（第5章）。第III部は、第二の主著『存在の彼方へ』（1974年）を中心とする後期レヴィナスにおいて主要な鍵概念となる「隔時性」がフッサール時間論のレヴィナスによる独自の解釈に由来することを示し（第6章）、「証言」と「書物」に着目する動向の内に過去という時間様相に対する態度の変遷を見て取る（第7章）。本論文の具体的な構成は以下の通りである。

序章　レヴィナスにおける時間論
　第1節　本論文の主題と先行研究の検討
　第2節　本論文の構成
第I部　前期レヴィナスにおける時間への問い
　第1章　レヴィナスと現象学
　　第1節　現象学との出会い
　　第2節　歴史性への目覚め
　第2章　『実存から実存者へ』におけるメシア的時間
　　第1節　主体性と時間
　　第2節　メシア的時間
　　第3節　瞬間と他性
第II部　『全体性と無限』の時間論解釈
　第3章　現在と主体
　　第1節　享受の時間性
　　第2節　エコノミーの時間性
　第4章　倫理的関係における順序と時間
　　第1節　先行性テーゼの解釈
　　第2節　先行性テーゼの解決
　　第3節　デカルトの読み替えとその意義
　第5章　エロスと繁殖性
　　第1節　「未だ…ない」もの：死とエロス
　　1-1. 死と忍耐
　　1-2. エロスと女性的なもの
　　第2節　繁殖性の読解方針
　　第3節　歴史批判
　　第4節　赦しという救済

第 5 節　『全体性と無限』における繁殖性の位置づけ
第 III 部　後期時間論の生成と展開
第 6 章　原印象と遅れ
第 1 節　感覚と原印象
第 2 節　隔時性の析出
第 3 節　隔時性の倫理的意義
第 7 章 証言と書物
第 1 節　生き残りの有罪性
第 2 節　典礼と書物
終章　時間の脱形式化へ
第 1 節　時間の脱形式化と本論文のまとめ
第 2 節　決定的なものと身代わり

論文概要

序章は、先行研究に対する本論文の位置づけを提示する。レヴィナスの時間論をめぐっては、すでに幾人かの論者が検討を加えている。しかし、それら先行研究は彼のさまざまなテクストにおける過去の哲学者との対決や個別的な論点の分析に留まり、時間に関する彼の議論がどのような地点を目指して展開されており、総体として何を主張しているのかを十分に提示するにはいたっていない。これに対して本論文は「時間の脱形式化」という構想の内にレヴィナス時間論の核心を見出し、これこそがレヴィナス哲学の生成や展開を牽引する中心的な役割を演じたと主張する。

第 1 章は、1930 年代から 40 年代の現象学論考におけるレヴィナスのフッサールやハイデガー受容の経緯を解明する。初期レヴィナスにとって現象学の課題とは意識が世界の中で存在に出会う仕方を徹底して具体的に記述することであり、その際世界が歴史的に条件づけられている点を看過することはできない。ゆえにレヴィナスはフッサールの反歴史主義的な傾向に対して批判を加えると共に、自己の存在の意味を具体的な時間性と歴史性の内で探求するハイデガーの議論を高く評価する。しかし、第二次世界大戦後レヴィナスは、ハイデガーの存在論が自己自身の死に先駆けることでその死をも自己へと回収してしまうがゆえに、ハイデガーもまた歴史の中で生きる具体的な生を観念論化してしまうと考え、批判的に捉え直すにいたる。

第 2 章は、前期レヴィナスの代表作とも言える『実存から実存者へ』(1947 年) において語られる「メシア的時間」の内実を分析する。メシア的時間は、現在の苦しみや死を未来の報酬や報復によって埋め合わせることを良しとせず、他ならぬこの現在において苦しみや死が贖われる時間が到来することを意味している。本章は、時間が瞬間ごとに断絶しており、神が世界をその

瞬間ごとに創造し直しているとするデカルトの「連続創造説」をレヴィナスが踏まえることで、主体が現在の苦しみからその度ごとに救済される時間性を考察しえたと論じる。

第3章は、『全体性と無限』第二部における「享受」と「エコノミー」という主体の在り方が時間の観点から特徴づけられていることを明らかにする。一方で、享受は感覚的な質をただ受け取り楽しむ快楽主義的な主体の存在様態であり、或る行為を何か別の目的のために行なう合目的な連関を欠いている。ゆえにその時間性は、過去や未来を気にかけることのないその都度的で刹那的なものである。他方で、いま為されている享受が必ずしも常に保証されているわけではない未来の不確実性を統御しようとするのが、エコノミーと呼ばれる存在様態である。ここでは主体は、享受の対象だった感覚的な質を持続して存在する「事物」の内に統合することで、自身が掲げる目的に即して当の事物を利用しうるようになる。エコノミーとは、過去を保持しつつ未来を予測する合理的な行為主体が統御する、現在を中心に過去と未来へと延び拡がる幅をもった時間性なのである。

第4章は、『全体性と無限』第三部で主に語られる他者との倫理的関係を主題とし、そこに見出される先行性という順序の問題に着目する。レヴィナスは、自我が他者に先行していると語ると共に、他者が自我に先行するとも述べる。本章は彼がデカルト『省察』の議論構成を取り入れていることに着目することで、この一見矛盾する先行関係を整合的に解釈する。『省察』においてデカルトは、「我思う（コギト）」の確実性を確保したのち、コギトに先んじて存在する神によって私の存在や認識が基礎づけられていたことが明らかになる、と論じた。こうしたデカルトによる論証を下敷きにすることで、本章は自我の先行性を我々の「認識の上で」先に知られる時間系列上の順序として、そして他者の先行性を「認識の上では」時間的に後から知られるものが「事柄そのものに即して」見た場合には論理的に先行している順序として解釈し、両者が矛盾するものではないとの解釈を提示する。

第5章は、『全体性と無限』第四部で展開される「エロス」および「繁殖性」という一連の主題を時間の観点から読み解く。レヴィナスは、エロス的関係において欲望が向かう「女性的なもの」を主体による支配から逃れていく神秘性を備えたものと見做し、その神秘性が主体に予見不可能な未来を垣間見せる契機になると論じている。本章はそのような未来が行き着く先として繁殖性が語られていることを指摘し、両主題の関係を明確化する。その上で本章は、「私は私の子である」と表現される繁殖性を二つの論脈から分析する。第一は歴史が有する暴力への批判という論脈であり、第二は私の過誤が赦されるという論脈である。一方で、レヴィナスにとって歴史家たちの営みは、個々人の意志を直接的にではなく、あくまでその者が遺した所産を介して理解するために、欠席裁判の如き暴力を含む。本章は、繁殖性で語られる「子」が私の死後も私を継承することで、歴史に抗して弁明し続ける時間性が切り開かれると解釈する。他方でレヴィナスは、過誤が赦されることで自己の存在が刷新される主体性論としても繁殖性を論じている。赦

されることで時間は逆転し、私は過去の過ちがなかったかのように生きることができる。本章は、赦しによる時間の可逆性によって獲得される新たな生こそ、レヴィナスが子として語った繁殖性のもう一つの内実であると主張する。

第 6 章は、倫理的関係を特徴づける「隔時性」という後期レヴィナスの鍵概念がフッサール時間論の独自の読解によって析出されたとの解釈を提示する。フッサールによれば、現在の中核に位置する「原印象」は到来しては失われて止まない流動であり、意識がこの流動の内で現在を捉えるためには、新たな原印象が到来する中で先の原印象がなおも意識の内に留め置かれる必要がある。ゆえに意識は到来する原印象に常に遅れており、それを事後的に把握することになるが、レヴィナスは意識と原印象との時間的なずれを背理ではなく、我々の時間経験の重要な特徴であると見做す。翻って「隔時性」とは、他者からの呼びかけが遡りえない過去から到来しており、他者を私の時間性に回収することができない事態を指し示している。本章は、原印象に対する意識の遅延というフッサール時間論の考察を経ることで、他者からの呼びかけに原理的に遅れてしまうという「隔時性」の構造をレヴィナスが手に入れることが可能になったと論じる。

第 7 章は、本論文第 5 章で扱った歴史批判という論点が有していた課題をその後レヴィナスが引き受け直し、過去や歴史との間に肯定的な関係を模索していたことを「証言」と「書物」という主題の下で明らかにする。『全体性と無限』の議論は歴史家による暴力を警戒するあまり、過去の他者や歴史を積極的に語ることのできないやや偏狭な構成となっていた。それに対して後期のレヴィナスは、第一に、他者の死を安易に物語として消費してしまうのではなく、絶えざる語り直しによってその者が生きていたことを証言する試みの内に過去の他者を暴力に抗して語りうる次元を見出している。第二に、レヴィナスは書物が作者以外の者によって解釈され、そこから作者の意図を超える新たな思想が生まれ出ることを肯定的に語っている。書物へのこうした評価は、歴史記述を筆頭にこれまで否定的に扱われていた「書かれた言葉（エクリチュール）」による解釈の運動にレヴィナスが積極的な価値を認めるにいたった変化を示している。

終章は、レヴィナスの言う「時間の脱形式化」が、川の流れや時計に代表される不可逆で単線的な時間理解を批判する「形式性の破壊」と、時間における形式よりもそこで生きられる経験の内容を重視する「具体的生の復権」という二つの意味をもつことを指摘したのち、本論文のこれまでの議論がこの二つの内のいずれかに該当することを示す。そのことを通して、晩年のテクストに現われる「時間の脱形式化」という構想はレヴィナスが生涯にわたって実際に展開していたものであると同時に、前期から後期にいたるレヴィナス哲学全体の展開を特徴づけるものであると主張する。その上で本章は、『全体性と無限』にいたるまでのテクストに見出される未来への脱形式化と、後期著作において「隔時性」として結実する過去への脱形式化という仕方で、時間の脱形式化が二方向へと分裂しているのはなぜかという問いを提起し、『全体性と無限』の本論末尾で語られる「永遠なもの」という到達地点がもはや時間性という枠組みを逸脱してしまう

危険性ゆえに方向の転換がなされたとの解釈を提示する。

審査概要

本論文は前期から後期にいたるレヴィナスの時間に関する議論を丹念に拾い上げ整理するに留まらず、それを彼の主体性論や他者論とも関連づけながら論じることで、「時間の脱形式化」という構想に結実するレヴィナス哲学の全体像を示すことを目指した水準の高い労作と言うことができる。以下、三つの側面から、とりわけ注目すべき点を述べる。

第一に、本論文は、レヴィナスのテクストを読解するにあたって個別的な主題として時間に焦点を当てて論じるのではなく、「時間の脱形式化」という観点からレヴィナス哲学が全体として企図していたことを明らかにしようとする野心的な試みである。研究の精緻化が進むと共に、ともすると細部に拘泥する傾向が現われてきてもいる現在の状況下でこのような大きな議論の枠組みを提供している点は、そもそも彼の哲学が何を問題としているのかを再考する上で高く評価される。「時間の脱形式化」がレヴィナス哲学における重要な主題の一つであることはこれまでも指摘されてきたが、本論文はそれが彼の哲学全体の主題であることを示すことに成功している。レヴィナスはその最晩年に、時間に関する著作を執筆する計画があると語っていたのだが、その計画が著作として刊行されることはなかった。「時間の脱形式化」を主題とする本論文は、この実現されなかった企てをレヴィナスの思想全体を通覧する仕方で補完するものと言ってよい。

第二に、本論文のもつ網羅性やテクスト分析の解像度の高さは、それ自体として評価に値する。『実存から実存者へ』におけるエコノミー的時間とメシア的時間の対立、『全体性と無限』で語られる享受とエコノミー、エロスと繁殖性、後期思想における隔時性、証言、書物といった主題群、『全体性と無限』から後期思想への移行をめぐる問題、これらを一貫して時間論の観点から解釈し直す行論は説得的で、本論文が採用している全体的な見地に立つことではじめて可能になった重要な指摘を多く含む。また、すでに膨大な数にのぼっている内外のレヴィナス研究に十分な目配りをし、これまでの解釈の流れやそれぞれの要点、限界について適切な指摘がなされており、この点においても本論文は今後のレヴィナス研究にとって不可欠な参照項となることが期待できる。

第三に、本論文は、レヴィナス哲学を時間の観点から読み解くことによって、現代の倫理学や時間論、さらには両者の関係といった主題にいくつかの挑戦的な問題提起を提供してもいる。具体的には、(1) 私が他者に対してもつ責任の必然性や逃れがたさを、人間の本性の内に倫理的関係を結ぶ根拠が備わっているとする或る種の道徳的本質主義として解釈する試み（第 3 章、第 6 章）や、(2) 歴史の内で生きていかざるをえない個々人の意志を歴史家による歴史記述の営みが暴力的に簒奪してしまう可能性をもつことを指摘し、それに抵抗するために証言を聞き、語り継

ぐことの必要性と困難さを説く議論（第5章、第7章）、(3) 赦しは単なる慈悲や過去の消去ではなく、過ちがなかったかのように存在し直すことを可能にする時間の逆転を含むという指摘（第5章）などが挙げられる。これらの問題提起は狭義のレヴィナス哲学研究の枠を越えて、哲学・倫理学研究一般における議論を呼び起こしうる。

上記のように本論文はその手法、着眼点、成果において高い学術的価値を有する論文となっているが、いくつかの点で今後の課題を指摘することができる。

第一に、各章をつなぐ論理的展開が必ずしも明確でない。本論文は「時間の脱形式化」という企てが前期から後期までレヴィナスの内で一貫して保持されていたことを示すために、扱うテクストを年代順に並べて論じる構成となっている。しかし、そのことによってかえって、各章間の論理的展開を構築する作業をおろそかにし、著作の年代順という形式的な時間性に安易に寄りかかってしまった惧れなしとしない。直線的・連続的で一様に流れ去る時間といった通俗的理解を「形式性の破壊」の名の下に斥け時間体験の「具体性の復権」をめざすレヴィナス時間論を根底で支える論理を、フッサールやハイデガーの時間論との対決と対話を重ねるレヴィナスの歩みの中から探り出すいっそう立ち入った論究がなされていれば、より広範な関心を惹起する論考となったはずである。

第二に、レヴィナスの時間理解に大きな影響があったと思われる哲学者の扱いに、不十分さが残る。本論文はレヴィナスがテクストで明示的に言及するデカルトやフッサール、ハイデガーらの議論を章ごとに個別的に扱ってはいるものの、レヴィナスが自らの先駆者として高く評価するベルクソンとローゼンツヴァイクに関する議論を欠いていることが惜しまれる。中でもメシア的時間、繁殖性、証言といった本論文の中核をなす主題群は、ローゼンツヴァイクの議論が下敷きとなっているものが多い。レヴィナス時間論の射程と奥行きを測る上でも、ローゼンツヴァイクの思想との対話や対決は今後取り組まれるべき課題と言える。

第三に、レヴィナス前期時間論を特徴づけるメシア的時間と後期時間論の中核をなす隔時性をそれぞれ未来志向的時間と過去志向的時間と捉える本論文終章でのいささかステレオタイプ的な議論の運びには、疑問が残る。上で述べたローゼンツヴァイクの思想がレヴィナスに与えた大きな影響も考慮に入れつつ後期のテクスト群を精査すると、メシア的時間の構想はレヴィナスの内で形を変えて残っていったと考えることもでき、その際の変容の論理の追究が不可欠となる。この意味で、終章後半部の考察には再考の余地がある。

以上のようないくつかの課題を残しているが、本論文は内外の研究を踏まえつつも既存の研究にはない新たな観点からレヴィナス哲学の全体像を統一的に描き出した水準の高いレヴィナス哲学研究として、また時間や倫理の問題に関わる刺激的な問題提起を含んだ密度の濃い哲学研究としても高い学術的価値を有しており、審査員一同は本論文が博士（哲学）の学位にふさわしいものであると判断する。